

『ベトナム：ドイモイと権力』を読んだ感想

水野孝昭（神田外語大学教授・元朝日新聞ハノイ特派員）

本文と付章で562ページの大著ですが、これまで知らなかったベトナムの指導部内の暗闘が次々と暴露されているので一気に読んでしまいました。

この本の魅力は、ホー・チ・ミンやヴォー・グエン・ザップら指導者たちが革命や戦争の様々な場面で、それぞれ迷い、対立しながら指導していた姿を生々しく描いていることです。ソ連や中国と比べて、ベトナム共産党は「集団指導」と言われてきました。党の最高権力者が健康で平和裏に交代することで先鞭をつけたのも、本書の主演のグエン・ヴァン・リン書記長でした。しかし、本書を読むと、ベトナム共産党も激しい権力闘争と無縁ではなかったことがよくわかります。

冒頭で、レ・ズアン時代に自由が抑えられていた言論界がリン書記長による投稿で活性化されていく様子が描かれています。1987年5月、党機関紙『ニャンザン』編集部自ら投書を届けにくる中年の人物。南部訛りで、乗っていた車は高級車「ヴォルガ」ではなく「ラーダ」だった…。それがリン書記長その人でした。24日付け一面に掲載された「NVL」署名の記事がドイモイの幕開けを告げたのでした。

ドイモイが、一部で誤解されているようなソ連の「ペレストロイカ」の焼き直しではなく、ベトナム共産党の指導者のイニシアティブで独自に始まったことを事実で裏付けています。その改革を支えたブレインたちの顔触れとともに、「土地改革」など過去の共産党の政策をめぐる論争も詳しく検討されています。韓国の民主化や天安門事件についてベトナムの知識人や学生に投げかけた影響も記録されています。

「党の問い直し」まで進みかけた改革ですが、ドイモイを推進したリン書記長自身がポーランドの自主労組「連帯」などの動きをみて警戒を強めブレーキ役に転じて、「党の指導的枠割」を強調。タガを締め直していくことになります。社会主義の危機を救おうと1989年10月のベルリンでのゴルバチョフ書記長との会談に臨みますが、「この惑星で一番の日和見主義者」に外交辞令であしらわれてしまいます。

党内外で高まった「政治的多元主義」の要求に、党政治局は改革派だったチャン・スアン・バイックの解任で対応します。一週間も批判され続けた彼が「私に罪があるなら認めるが、罪はない」と言い残して、一張羅の晴れ着姿で党幹部用の別荘か

ら去っていく場面も映画を見るような描写です。

後継者となったヴォー・ヴァン・キェットとの確執も詳しく描かれています。「改革派」とひとくくりにされていましたが、首相になったド・ムオイをまじえて、気質の違いもあって相互不信にかられていく様子が興味深いです。

特筆すべきは、国民的英雄で今も人気の高いザップ将軍の孤立ぶりを描いた第4章でしょう。

ベトナム戦争中に北爆のきっかけとなったトンキン湾事件について、米艦への攻撃命令を出した責任をめぐりザップとヴァン・ティエン・ズンで意見が対立して、中央軍事委員会で処分が出ていた、というのはこれまであまり知られていなかった戦史の一コマでしょう。

驚いたのはテト攻勢前に、ホー・チ・ミンは「療養のため」北京、ザップ将軍はハンガリーとそれぞれ国外に滞在させられ「蚊帳の外」に置かれていた、という記述です。「総司令官が大作戦を作战開始日まで知らされていなかった」というのは驚きでした。レ・ドゥォク・トの権力が強まって、ホー・チ・ミンの秘書やザップ将軍の側近たちは「反党分子」として逮捕されていきます。ベトナム戦争の大きな節目となったテト攻勢の最中に、「一枚岩にみえたハノイでは党の最高レベルで熾烈な権力闘争が繰り広げられていたのです。

筆者は20年以上の記者生活で集めた資料をもとに、3年がかりでこの2冊を書き上げたといいます(原著は上下)。米国ハーバード大のニーマン・フェローも経験した筆者は、ベトナム側の取材だけでなく、キッシンジャー回顧録などとも照らし合わせていて、ジャーナリズムとしても一級の作品と思います。

ベトナムでは出版できないままという本書を「勝者の側によって語られてきたベトナム現代史を見直し、事実を客観的に検証しようという試み」と評価して、翻訳をやり遂げた故・中野亜里さんの慧眼と執念に深く敬意を払います。

ただ、ベトナムの読者を想定して書かれているうえ、全体の構成も一般読者には非常に分かりにくいのが難点です。章ごとに時系列で進むわけではなく、唐突に過去の問題に触れたり戻ったりするなど前後して、現代史の知識が相当ないと混乱します。

その点、小高泰さんによる各章の冒頭サマリーはよくまとまっていて、全体の見取り図になっていて大いに助けになります。